The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Four Quartets についての一考察 : 二つの道
Author(s)	岡村, 祥子
Citation	Osaka Literary Review. 1974, 13, p. 88-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25740
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Four Quartets についての一考察

——二つの道——

岡　村　祥　子

I

前の論文では Eliot の詩劇 *The Cocktail Party* の中で示された「二つの道」を取り上げ，この劇と *The Murder in the Cathedral*, *The Family Reunion* の三つの詩劇の中でのこれらの道の展開の仕方を考察した。(1) これらの道はこの世を超えた永遠の世界の存在を認識した者の生きる道であり，かつ存在の目的と意味を失なった，空しい生き方をする世界に対立している。さてこの二つの道の第一のものは否定の道と呼ばれ，この世との葛藤を体験しながら永遠の世界を選択し，更にこの世にとらわれず，徹底的に自己を放棄しつつ，暗闇の中を信仰のうちに進む道である。第二のものは肯定の道であって，永遠の世界を認識しつつも，この世の中に止まり続け，新たな精神に目覚めた意識を持ってこの世を生きる道を言う。

又先の論文で二つの道の考え方が *Four Quartets* においてすでに見られることにちょっと触れたが，ここでは *Four Quartets* を取り上げ，二つの道の考えがその中でどのように展開されているかを考察したい。それはこの詩が先の詩劇と製作年代においても製作過程においても密接なつながりを持っており，それを明らかにしておく必要があると思われるからである。

まず *Four Quartets* と詩劇の関係について述べると，四編からなって

いる *Four Quartets* が一冊の詩集として出されたのは 1944年であるが，第一の 'Burnt Norton' は1935年に書かれ独立した作品として出されている。この 'Burnt Norton' は先の *The Murder in the Cathedral* (1935) が製作された時，劇として上演するには不向きだと言われた断片が詩人の心の中でだんだんと詩を形造っていったものであると Eliot 自身が語っている。[(2)] *The Family Reunion* (1939) の出された翌年第二の 'East Coker' が出されたのであるが，この詩を書いている時に *Four Quartets* としての構想がわいたとこれも又 Eliot 自身が述べている。[(3)] 引き続いて1941年には 'Dry Salvages' が，1942年には 'Little Gidding' がつくられ，'Burnt Norton' で取り上げられたテーマが基礎となって展開され、変調され，まとめ上げられている。以上のように 'Burnt Norton' から出発した *Four Quartets* の詩劇との関わりの深さが考察できる。実際に二つの道という言葉は 1950年の *The Cocktail Party* まで用いられていないが，*Four Quartets* の中にすでにその考えが見られると思われる。

Four Quartets のテーマを一言で述べることは困難であるが，それは時と永遠の関係、時の中に生きる人間がどのようにして永遠に触れることができるか，また時と永遠がどのように調和，和解されるか等であるといえる。ここでは特に人間の世界とその中での生き方を直接取り上げていると思われる個所を具体的に見ていきたい。

II

第一編の 'Burnt Norton' で幸福に充ちたひと時を体験した者が，その光にみちた一瞬がこの世を超えた世界の存在を知らせるものであることを知り，時の中に生きる者として，どのようにしてその存在に近づくことができるかが考察されている。さて人間世界が取り上げられているのは第Ⅲの movement においてである，

Here is a place of disaffection
Time before and time after
In a dim light : neither daylight

Investing form with lucid stillness
Turning shadow into transient beauty
With slow rotation suggesting permanence
Nor darkness to purify the soul
Emptying the sensual with deprivation
Cleansing affection from the temporal.
Neither plenitude nor vacancy. (4)

現代社会を説明して以上のように言うのだが、Eliot の詩の中にはしばしば dim light とか twilight などのような言葉によって現代世界の状況が示されている。それは漠然とした意識しか持たないような人々の住まう所で，彼等は目的を見失ない進むべき方向を見出せず，ただ惰性的に生きているにすぎない。続いてこの現実の都市 London に住む人々の様子を述べて，人々の感覚は麻痺し，何ら意味ある思考を行なうことなく，風に吹かれてくるくる舞う街路の紙片と同様の存在であるといっている。汚れた大気の中を歩む疲れ切った人々の顔には生気はなく，空ろな世界を形造っているのみである。先の引用の所でここにあるのは daylight（白昼の光）でもなく，darkness（闇）でもないと定義づけることによって，この世と相対立する世界が二つの言葉，光と闇によって示されることになる。即ち twilight によって示される中途半端な世界は，光にしろ闇にしろはっきりした世界とは対照的な存在である。光はこの世を超えた世界からの恩恵によってこの世の一時的なはかない存在に変化を与え，充満をもたらす輝やきにみちた世界を意味する。一方の闇も矢張りこの世を超えた世界に達するために，感覚を空しくし，魂を浄化する世界を意味する。完全な恩恵と魂の浄化という方法が示されるが，ここで更にくわしく説明されるのは暗闇の世界である。

Descend lower, descend only
Into the world of perpetual solitude,
World not world, but that which is not world,
Internal darkness, deprivation
And destitution of all property,
Desiccation of the world of sense,

Evacuation of the world of fancy,
Inoperancy of the world of spirit; (5)

と表わされている世界は十字架の聖ヨハネの *The Dark Night of the Soul* に示されている神秘思想にみられる世界であり，魂が神にむかって進む時に辿る道である。これはいわゆる否定の道として説明され，感覚も思いも精神も完全にこの世に属するものから切り離され，空しくすることによって浄化されていく道である。このように暗闇と関わりのある世界はくわしく述べられているが，一方の光の世界はここでは説明されていない。このことは現代において神の豊かな恩恵に対して全き信頼を寄せて生きることの不可能なことが暗に示されていると考えることができる。しかしエピグラフに 'The way up is the way down' とあるように，ここで述べられている暗闇に下っていく道も時を超えた存在に向かう一つの方法であり，ここではただ一つの道であるかのように示されている。このようにここでは時を超えた世界に気付いた者に対してこの世は相容れない様相を示し，否定の道の可能性だけが示されている。

さて 'Burnt Norton' で個人的な経験として述べられてきた人間存在の問題は第二の 'East Coker' に移ると人類全体の生活の誕生，成長，老衰，死というパターンでとらえられ，時の推移が考察されている。'East Coker' の第Ⅲの movement でも矢張り現代社会が取り上げられている。この時代の人間の住む世界は空虚であるが，彼等の死後の世界も単なる空間でしかなく，空しく過ぎ去っていく人間存在が示されている。あらゆる種類の人々，身分の高い人も財宝をもっている人も著名な人も同様な生活を送り，消えていくことになる。この暗黒に包まれた世界，人間存在の意味も理解されない世界の状況の中にありながら，一方で違った世界の存在を見出す可能性も示される，'I said to my soul, be still, and let the dark come upon you / Which shall be the darkness of God,'(6) 即ち，目覚めた意識を持つことによってこの暗黒が神の暗闇に変化する可能性が示される。続いて現代社会の日常生活の中で体験される具体的な暗闇が述べられている。第一は劇場で舞台が暗転し，舞台で使われた全ての装置が取

り去られていくのを暗闇の中にいながら知るという経験である。第二は地下鉄で何かの事情のために駅と駅の途中で列車が停車した時，それまで話し声などが聞こえていた車内がだんだん静まり，不安におびえて何ともいえない恐怖が人々の顔に浮かんでくる空ろさを知ることである。第三は麻酔をかけられた時，だんだん思考能力がうすれていき，ただ意識があることだけを意識するという経験である。これらの暗闇は目覚めた意識をもって接することによって意味ある経験に変わる可能性がある。即ち三つの暗闇の状態は魂の浄化の三段階として考えることができる。G. Williamson の説明(7)をかりると，第一の劇場は全てのものが奪い取られていく意識を示し，地下鉄では空しさ，空虚さが深まっていく意識，そして麻酔は意識のみ意識する意識と説明される。即ち受動的にこの暗闇を受けることによって暗闇が意味あるものとなるのを待つ状態を指す。更に信仰，希望，愛を持たずに待つという徹底的な受身の暗闇の世界が示されている。しかもこの道は時を超えた世界へ通じる一つの方法であり，あたかもこの考え方を支持するように，'Burnt Norton' で示されたより遙かに厳しく徹底した表現が続いている。

In order to arrive there,
To arrive where you are, to get from where you are not,
You must go by a way wherein there is no ecstay.
In order to arrive at what you do not know
You must go by a way which is the way of ignorance.
In order to possess what you do not possess
You must go by the way of dispossession.
In order to arrive at what you are not
You must go through the way in which you are not. (8)

この個所が十字架の聖ヨハネの言葉を土台にしていることはすでによく知られているが，この自己を徹底的に放棄し，完全な自己滅却によって神に至る道はヨハネの否定の道の中心的な面を見せている。このような表現を用いることによってこの世を超えた世界に生きることを望むものにとって示される道の困難さ，苛烈さが浮き彫りにされる。しかも 'East Coker'

ではこれ以外の方法は示されず，唯一の道のように表わされている。以上ここでも現代世界とそれを超えた世界を知る者の世界が対照されて，一層厳しく徹底した道が示されている。

第三の 'Dry Salvages' は川と海の考察からはじまり，'East Coker' に続いて人類全体の歴史をかえりみ，旅人としての人間をとらえ，過去や未来に対する人間の考え方が考察されている。第Vの movement の所でもその面から人間を眺めている。即ち，この世の生にのみ執着している人間にとって過去や未来を知る方法は各種の占いや妖術などであり，ここでは火星との通信，霊媒による降神術，腸卜，水晶占い，手相，トランプ占いなど次から次へと探る方法があげられている。文明化されているロンドンのような都市であろうと，辺境の地であろうと本質的には人間が変らないことが語られ，人間の持つ弱さが示されている。更に人間的な考えに基づいた過去や未来に対する態度の中でこれとは対照的な立場を取る生き方が続いて述べられている。

But to apprehend
The point of intersection of the timeless
With time, is an occupation for the saint-
No occupation either, but something given
And taken, in a lifetime's death in love,
Ardour and selflessness and self-surrender.
For most of us, there is only the unattended
Moment, the moment in and out of time,
The distraction fit, lost in a shaft of sunlight,
The wild thyme unseen, or the winter lightning
Or the waterfall, or music heard so deeply
That it is not heard at all, but you are the music
While the music lasts. These are only hints and guesses,
Hints followed by guesses; and the rest
Is prayer, observance, discipline, thohght and action.
The hint half guessed, the gift half understood, is Incarnation. (9)

ただ，ここではこれまでとは違い，二種類の人々について言及されている。第一は時と時を超えた世界との交点を理解する人々として聖人があげ

られている。聖人達はこれまで述べてきた聖ヨハネの否定の道と密接な関係を持つ。即ち，彼らは神への生活のために自己を捨て，全き愛のために捧げ尽すことを神との交わりに到着する唯一の方法として受け入れ，徹底的な生き方をする。これは 'Burnt Norton,' 'East Coker' で示された道を生きる人と考えられる。しかし，今までとは異なり，ここでは第二の種類の人々が描かれており，しかも 'For most of us' という表現によって先の生き方よりも一般的で多くの人々に向けられたものであることが示されている。彼等は先の交点を理解することは不可能であり，ただある瞬間を経験して，それによって半ば暗示をうけ，半ば推測することによってのみその点を認め得る種類の人間である。しかし，この二種類の人々にとって共通なのは時を超えた存在，即ち永遠の世界を自覚し，真実の生き方を求めていることである。しかもこの時を超えた世界の存在を知るのはどちらにしろ，人間の力によるのではなく，ある瞬間に神からの恩恵として与えられるということである。第二の種類に属する人々が経験する瞬間として先の引用の 9 行目からの 'the moment in and out of time,' 'the distraction fit,' 'lost in a shaft of sunlight,' 'the wild thyme unseen,' 'the winter lightning' などのイメージは 'Burnt Norton' や 'East Coker' の中ですでに用いられており，これらは一瞬のうちに過ぎ去るが，歓喜にあふれ，喜びに満たされたある束の間の時を示している。'Burnt Norton' では個人的な経験として，又 'East Coker' では人類の味わう体験として語られていたが，このような経験がここでは意味を持ち始める。誰でも体験するこのような一瞬に，ある人達は時をこえた世界をかい間みてその一瞬の意味を尋ね始める。この探究の意識を持つことによってこの世は新しい様相を示すようになる。このように 'Dry Salvages' の中で，これまでとは違い，特別な生き方をとらないで日常的な世界の中で，祈りや行為を通じて生きる方法が，しかも大多数の人間の取る道として示されている。以上のように二つの生き方が，ここではじめて提示されることになる。

最後の 'Little Gidding' ではこれまでのテーマが統合されて述べられている。Little Gidding は何世紀も前に祈りの共同体が作られ，人々が祈る

ために訪れたイギリスのある場所であるが，そのチャペルへ行く道に生け垣があり，第Ⅲの movement ではそれに三つの花が咲くと述べられている，

There are three conditions which often look alike
Yet differ completely, flourish in the same hedgerow:
Attachment to self and to persons, detachment
From self and from things and from persons; and, growing
between them, indifference
Which resembles the others as death resembles life,
Being between two live-unflowering, between
The live and the dead nettle. (10)

ここで花を咲かさない花の indifference（無関心）と二つの生として示される attachment（愛着），detachment（超脱）との間には外見的に似ていながら決定的な違いが存在する。これはこれまでと同様生き方についての違いと見ることができる。無関心の世界は真実の愛を発見しない生き方であり，欲望のままに生き，自己以外の人間に対して心を閉ざす人間の状態を示し現代社会を暗示している。一方愛着と超脱は対照的な表現がなされているが，両方共等しい基盤に立った生き方として語られている。当然のこととして人間は第一に自己を愛し，それから人を，この世のものを愛する，言いかえれば，現実に見え手で触れることのできる世界での愛から出発していく。次の段階としておこり得るのがその世界から離脱することである。現実の世を超え，一歩高い所から眺めることによって全てが新しい意味を持つことになる。それはより高い次元の世界を理解し，愛することから起こる。

III

以上 *Four Quartets* の中でここで取り上げたテーマが示されていると思われる所を考察した結果，それぞれの個所でも触れたが，明らかにまず対照的な二つの世界が示される，即ち時に縛られた人間の住む世界と時を超えた世界を意識する世界が明確にされる。文明が崩壊し，価値観が見失な

われた現代世界に対する描写は初期の詩から変わっていない。*The Waste Land* の 'Unreal City' で始まる London の描写は同じ London の都市を描写した 'Burnt Norton' の一節と殆んど同じように現代社会の荒廃を描き出している。Dante の Limbo を下敷に持っており世界の空しさを一層強調している。これ以後 *The Hollow Men* においても 'Not that final meeting / In the twilight kingdom'(11) に見られるように，この世は薄暮の世界であり，希望なき世として示され，*Four Quartets* まで一貫した表現が続いている。

このように詩劇の世界も含めて Eliot の詩の世界は現代が救い難く，荒廃にみちた社会であるということを前提として出発している。

このような現代社会を背景として，この世の現実を直視しこれを超える世界の存在を意識する経験を持つ人間の歩む道が先の個所で探究されているが，前半の二つと後半の二つの世界との間には変化が見られる。前半では十字架の聖ヨハネによって説かれた否定の道が示され，自己を浄めるためにひたすら感覚や精神を無にし，この世の事物を切り離し，孤独の世界へと入っていく道が強調されている。そこに見られるのは徹底的に現実の世界から離れて真実の世界を見出そうとする傾向である。しかし，後半になると先のヨハネの道は前面に出されず，しかもここでは時なき時，永遠の存在に目覚めた人間が生きるのはただ一筋の道だけではないことが示されている。'Dry Salvages' の中で一方には徹底的に生きる聖者の姿が描かれているが，当然のこととして，全ての人間にとって聖者の道を歩むことはできず，大多数を占めるのは平凡な生き方をする人である。この意味からそのような人々の生き方が明確に示されたと考えられる。'Little Gidding' では愛着と超脱という二つの生が示されていて，愛着は超脱に至る前段階と見なすこともできるが，現代世界において自己に対して真実の意識をもちつつ，具体的に，人に対して諸事に対しての愛の行為を行うのも一つの道であり，それを超えて永遠なるものに全てを捧げるためにこの世のものから超脱するのも一つの道ということができる。こうして前半で見られた厳しく激しい生き方の追究，徹底した自己否定，この世からの離

脱という考え方は後半では強くは示されなくなる。すでに 'East Coker' の中でも人間にとって唯一の知恵は謙虚であり，年をとってもいつまでも探究者であることが必要であり，あらゆる瞬間に燃える人生であることの必要性も述べられているが，後半に入ってくるとより広く，日常の生活を肯定する考えがみられる。Helen Gardner が前半の tragic な調子が後半になると comic な調子になると指摘しているが，[12] 確かにここでもっと楽観的で包括的な方向へ移っていると考えられる。

更に 'Dry Salvages' においては受肉の完全な理解は聖者に委されながら，平凡な人間にとっても受肉を半ば推測される暗示，半ば了解される賜物として与えられ，人生，歴史の真実な意味が発見されうる。というのは過去にしろ未来にしろ，時というものが意味を持ち始めるからである。それが 'Little Gidding' に入ると一層全体の様子は明かるさにみち，全てを受け入れる豊かさがみられる。時を超える世界を知った者は自己のありのままの姿を認め，愛の存在を発見することによって，重要なのは今，この場所であることを知ることになる。愛が存在するからこそ，愛着にも一層の意味が与えられる。このような生き方を発見する時，'all shall be well and / All manner of thing shall be well' [13] と言われ，より広く，寛大な生き方が容認されていくことになる。以上のように *Four Quartets* の中での変化は詩劇に見られる変化と一致し，愛の中で肯定の道と否定の道が共に存在することが認められる。

注

(1) 「Eliot の詩劇における二つの道—肯定の道を中心に—」(O. L. R. No. XII, 1973) pp. 76—88.

(2) 'The Genesis of *Four Quartets*' in *Four Quartets* (ed) B. Bergonzi (Macmillan, 1969) p. 23.

(3) *Ibid.*

(4) *Collected Poems, 1909—1962*, (Faber and Faber, 1963), p. 192.

(5) *Ibid.*, p. 193.

(6) *Ibid.*, p. 200.

(7) cf.G. Williamson, *A Reader's Guide to T. S. Eliot*, (Noonday Press, 1967), pp. 220—221.

(8) *Collected Poems*, p. 201.

(9) *Ibid.*, pp. 212—213.

(10) *Ibid.*, p. 219.

(11) *Ibid.*, p. 90.

(12) cf. 'The Comedies of T. S. Eliot' in *T. S. Eliot: The man and his Work*, (ed) Allen Tate, (Chatto & Windus, 1967) p. 161.

(13) *Collected Poems*, p. 219.